

名勝・臼井八景

# 遠部落雁

とおべらくがん

手を折りてひとつふたつとかぞふれば

みちてとおべに落つる雁がね

鹿島川が印旛沼に流れ込むあたりは、昔から遠部と言われてきた。この川口一帯には鹿島川が運んできた砂によつて広い洲ができ、そこは鳥たちにとって、この上ない遊び場であつた。秋になると付近の稲や粟が実つて渡り鳥の格好の餌場となり、また安全な休息地でもあつた。

沼辺の芦が枯れ始める頃、列を作つて飛んできた雁の群がこの砂浜に舞い降りてくる。そして長旅で疲れた翼を休め、餌をついばんで空腹を満たしていた。飛んできた雁の列を眺めて、指を折りながらその数を一つ、二つと数えているとちようど指いっぱいの子という数になつたとき雁たちは遠部の浜に落ちるように舞い降りてきた。

と、前掲の歌は十と遠部を掛けて落雁の風景を詠んでいる。

選文 立原 三知男

令和七年度に佐倉街づくり文化振興臼井基金の助成を受け修繕しました